

## 5. コロンビアの体質 7

天理教コロンビア出張所長  
清水 直太郎 Naotaro Shimizu

前はコロンビア的「個人主義」を述べた。今回はコロンビア人的性格要素の中で、「陽気」と「約束について」を解説していこう。

### \*陽気 (気持ち・性格の明るさ)

コロンビアは国民がみな陽気であり、明るいということである。その他のラテンアメリカの国民性の中でも「陽気」は存在するが、とくにコロンビア人は、自国に治安問題 (犯罪や殺人の多さ)、ゲリラや武装組織と政府の抗争、誘拐、麻薬問題を抱えているのにもかかわらず、暗い雰囲気の人はい少なく、明るい人の方が圧倒的に多いと感じている。また、世界的に見て「幸福度」も常に上位に位置している。

確かに言えることは、「どんな時でも」陽気であるということなのだ。槇原敬之の歌ではないけれど「僕が僕であるために」陽気である。たとえ内紛が起ころうとも、最近ではコロナウィルスで厳しい都市封鎖の政策の中においても、コロンビア特有の「陽気さ」はなくなる、というか関係がない。その陽気さといっても、どのような陽気さかと言えば「パーティー」(フィエスタ) なのだ。コロンビアはもとより、中南米地域はこのフィエスタ文化が重要な価値観でもある。つまりコロナウィルスが一番喜ぶ「蜜」が大切なのだ。そしてフィエスタに付き物はダンスとアルコール飲料である。

興味深いデータがある。コロンビアにおけるロックダウンは昨年 (2020) 3月25日から始まった。そして空港や国内の交通閉鎖は9月1日まで施行され、現在 (2021年5月) まで断続的に、特に連休・週末には現在もコントロールが行われている。現在は三種類の規制 (身分証番号外出規制、禁酒令、外出禁止令) が週末や連休に発令されている。コロンビアの全国紙 *El Espectador* に昨年4~8月までの5ヵ月間に摘発されたパーティーについて、次のように書かれていた。

この5ヵ月にも満たない時期にカリ、メデジン、バランキージャ、カルタヘナの4都市において7,701件の違法であるフィエスタ (パーティー) が摘発された。これは行政と警察がコロナウィルスまん延防止に対する挑発現象ともとらえられている<sup>(1)</sup>。

警察や行政に対する挑発行為かどうかはともかくとして、コロナ現象のずっと以前から、週末は踊ってお酒を飲んで過ごすのがコロンビアの「陽気」の一つの形、つまり文化なのである。

取り締まりの罰則は厳しい。この4都市での5ヵ月で118,000人が出廷を求められ、罰金は総額1,171億7,500万ペソ<sup>(2)</sup>にもなる。実際にはその金額のお金がどうなったかは定かではないが、そういう罪を犯しても陽気にしたい、なりたいたのがコロンビア人気質なのである。平たく言えば何があるかと我慢ができないのかもしれない。

よく言われるのが「踊りに行こう、お酒を飲みに行こう、という誘いを断る人は二種類いる。病人かコロンビア人でないかのどちらかだ<sup>(3)</sup>」。

地方によっても「陽気」のやり方というか出し方は違うらしい。地域ごとの陽気の価値観が異なるコロンビアである。一般的に言われているのは、海岸地方の人たち (costeños) は騒がしい、賑

やかな人種ということだ。海岸地方はアフロ系、すなわち黒人系の人種が多く、黒人系=アフロのリズム音楽・ダンス好き=賑やかという構図が一般的である。



パーティーを取り締まる警官  
<https://www.elespectador.com/noticias/nacional/las-7701-fiestas-que-han-violado-la-cuarentena-en-cuatro-ciudades/>

またフィエスタの語源でもある宗教儀式において、非カトリック教会の新興キリスト教の行事は、ダンスあり、コンサートありと、その「音量」は大きい。

### \*約束について

これは国民性かどうかかわからないが、コロンビア人が約束を守るとか守らないとかいうことよりも、自分の人生、生活の中で「優先順位」がすでに確立されているということだ。それが仕事関係であっても、約束したからには何があってもそれを守ることではない、と私は最近気がついてきた。たとえば洗濯機の修理で「明日、午前9時に来ます。よろしく」とお願いして、翌日9時に修理人が来たら、それだけで「すごい、信用できる」となる。最近ではマシンにはなっているものの、普通は9時どころか、その日に来たら良い方、2、3日後の午後3時、自分の都合の良い時間に現れることもある。これも、その個人個人に依るといえるものの、最初のうち (コロンビアに赴任して) は「なぜ時間通りにこなかったのだ?」と詰め寄ったことがあった。その場合、決まって、1) 交通事情 (車がエンコしたとか渋滞とか)、2) 家族の事情 (母親が病気とか子供が云々とか) と必ず言い訳を用意している。つまりコロンビア人にとって一番大事なのはなんと言っても家族なのだ。家族の絆を大切にすることは昨今の日本人どころではない。でも、家族を大切にすることは、その本人しかできず、代替できないことなので、それは正論だと思う。だから、たとえ約束を守らない事で相手に損失を与えたり、無礼になっても、自分の「恥」だとは思わない。

「可能な限り対処します」という伝統的かつ慣用的な言葉は、暗にこちらが「約束は遂行しないな」と分かっている、十分に精一杯手を尽くす、「できるだけやるから」という「弾力性」をつけることによって、相手との関係を維持することも考えられる。

しかしながら、学識者は「この約束を遂行しない現象は、今日のコロンビア社会において根底にある不信感をますます増長させている<sup>(4)</sup>」と評している。

[参考文献及び URL]

- (1) エル・エスペクトドル紙: <https://www.elespectador.com/noticias/nacional/las-7701-fiestas-que-han-violado-la-cuarentena-en-cuatro-ciudades/>.
- (2) 日本円で約40億円。
- (3) German Puyana García, “¿Cómo somos? Los Colombianos”: 48.
- (4) Germán Puyana Gacía:49.